

白石裕二氏

愛媛県立愛媛中央産業技術専門学校

（旧・愛媛県今治高等技術専門学校）講師

タオルづくりは、人づくりでもある。産地に技術はあるが、それを受け継ぐ人がいない。現在、産地が抱える深刻な問題のひとつである。今回の「タオルびと」は、そうした問題を解決するために奮闘する、愛媛県立愛媛中央産業技術専門学校の講師・白石裕二氏である。誰もが、今治タオルの将来を考えるときもっとも大切なこととして人材育成を挙げるが、白石氏は、1989年から同



白石裕二氏

校の講師に就き、タオルづくりの基礎から応用まで幅広い技術を指導・伝授している。


モットーは、「一緒に考え、作っていく」ことであり、生徒たちと同じ目線に立って指導する。そのため、長年現場で教えていても新しい発見があると言う。将来のタオルマイスターの誕生を心待ちに、白石氏は今日も人材育成に粉骨砕身する。



しらいし・ゆうじ ☆ 1954年7月、今治市常盤町生まれ。二人兄弟の次男として誕生。父親の仕事の関係で今治市立常盤小学校4年生のときに滋賀県瀬田町に引っ越しをしたが半年後に帰今し、同校を卒業。その後、今治市立日吉中学校、愛媛県立今治西高等学校を経て、1972年4月に神戸大学工学部に入学。神戸で5年間を過ごしたのち帰今し、越智タオル工場を継承。タオル工場の経営者兼タオル製織の技術者としてゼロからのスタートを切る。1989年、タオル製造に従事する傍ら、愛媛県立愛媛中央産業技術専門学校（当時は愛媛県立今治高等職業訓練校）の講師に着任し、現在に至る。

1. 幼・少年時代

勉強もスポーツも一所懸命の少年時代

白石裕二氏は、1954年7月22日、今治市常盤町にて父・初夫氏と母・久子氏の間二人兄弟の次男として誕生した。父親の初夫氏は、広島県師範学校（現在の広島大学）を卒業後、大工をしていた祖父（初夫氏の父親）の急死によって長男ゆえにすぐさま帰郷を余儀なくされ、今治に本社を構えて広幅綿布を製造する丸今綿布（株）に入社した。同社では、原料となる綿糸の買い入れや原価計算などのデスクワークをおもに担当していた。


白石氏は、私立精華幼稚園に通っていた頃まで犬が怖くてひとりで幼稚園に行けないほど臆病な子供だった。今治市立常盤小学校に入学してからは、臆病さは影を潜め、水を得た魚のように勉強とスポーツに一所懸命に打ち込む快活な少年へと成長した。駆けっこが得意で学校代表でリレーの選手に選ばれるほどスポーツ万能で、しかも勉強もできたため、4年生の進級時に半年間の空白期間があったものの、6年間級長（学級委員長）を連続して務めるなどクラスの人気者であった。



小学校6年生のリレー大会にて（前列左が白石氏）

この空白期間は、父親の勤めていた丸今綿布が広幅綿布の需要減少から経営規模の縮小を決めたため、これをきっかけに父親が滋賀県栗太郡瀬田町（現在は大津市瀬田）にあった母の姉の夫が経営する鉄工所に転職し、一家で瀬田町に引っ越したからである。しかし、半年後には一家はふたたび帰郷し、父親はタオル製造・販売をおこなう中忠（株）に入社し、初めてタオルの世界に身を置くことになった。数字に強かった父親は、中忠では整経に係わる業務に従事し、タオルの原料となる綿糸の相場を予測したり、設計されたタオル生地に必要な綿糸の長さを計算したり、日々忙しく働いた。そして、最終的には工場長に就任し、定年まで勤め上げた。

父親が定年を迎えたちょうどその頃、当時の愛媛県立今治高等職業訓練校（現在の愛媛県立愛媛中央産業技術専門校）が整経を含めた準備工程に関する実技を指導できる人材を探しており、父親に白羽の矢が立った。そして、1979年に中忠を定年後、父親はこれまでのキャリアを生かして同校の整経科の初代講師として、およそ10年間生徒の指導にあたった。父親の後を継いで、白石氏ものちに同校の講師となり、タオル製造に携わる技術者の育成に尽力することになる。

白石氏は、瀬田町で暮らした日々についてあまり覚えていないが、瀬田の唐橋  の近くで遊んだのはおぼろげに記憶に残っている。白石氏本人は、父親の仕事の事情がどうであれ今治に戻れるだけで嬉しかった。帰郷後は半年の空白期間をものともせず4年生の後期から常盤小学校に戻り、勉強にスポーツに変わりない活躍を見せた。転校する前と担任の先生も同じで、半年ぶりに復学した白石氏を快く受け入れてくれた。

日本三名橋のひとつに数えられている瀬田の唐橋
（出典：びわ湖大津観光協会ホームページ「びわ湖
大津トラベルガイド」フォトライブラリー）



常盤小学校を卒業した白石氏は、今治市立日吉中学校に進学し、生徒会にあたる中央委員会で3年間委員を務め、同時にバレーボール部に所属した。生徒会活動や部活動をとおして終生の友も得た。中学時代はそこそこに勉強し、そこそこに運動し、そこそこに遊んだが、突出していたのは数学の成績だった。



小学校4年生の頃に撮った家族写真（左が白石氏）



中学校3年の運動会にて（左が白石氏）


中学校を卒業後は、県内でも屈指の進学校である愛媛県立今治西高等学校に1969年4月に入学した。入学して半年間、卓球部に所

属したが、一緒に進学した中学校からの仲の良い友だちと遊びに夢中になり、部活動や勉強よりも遊び中心の高校時代を過ごした。今振り返ると、「もっと勉強すべきだった」といささか後悔することがあるのは、長年講師を務めている白石氏は学生たちに「もっと勉強せい」といつも言っているからである。反面教師的な含みがある。

勉強そっちのけで遊び呆けていた白石氏だったが、いったん目標が定まると「ここぞ」とばかりに発揮される集中力はずば抜けていた。高校3年生の半年間で猛勉強し、国立大学への進学を決めたのである。


2. 大学進学と同時に神戸へ

学生運動の最中、異様な大学生生活がスタート

理数系科目が得意だった白石氏は1972年4月に神戸大学工学部に入学した。神戸大学は「国立学校設置法」公布により1949年に神戸経済大学、姫路高等学校、兵庫師範学校などを包摂して設置された関西の名門国立大学である。同大学は、1902年設立の神戸高等商業学校を前身に持つため経済学・経営学分野に強いと言われ、神戸高等商業学校時代の卒業生には、たとえば（株）豊田自動織機製作所初代社長の豊田利三郎や鈴木商店  破綻後に日商（株）（現・双日（株））を再建し同社会長に就任した高畑誠一などを輩出している。高畑は、内子町出身で旧制西条中学校（現・愛媛県立西条高等学校）を卒業しており、愛媛県ともゆかりのある人物である。

神戸大学は戦後も数多くの経営者を育てているが、白石氏と同じ理学・工学分野においても優れた人材を世に送り出している。たとえば、2012年に「iPS細胞の研究」でノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥氏は、神戸大学医学部の卒業生である。

名門の神戸大学へ晴れて入学した白石氏の大学生活は、1972年

4月にスタートした。神戸では月々の家賃が1,200円の男子寮に入寮し、二人部屋の狭い空間であったが、同期生や先輩たちと中身の濃い学生生活を送った。つまり、学生運動がなおも活気を帯びていた時期で、重装備で顔を隠して学生デモに加わったり、学生運動家たちのバイブル的存在であったマルクス・レーニン勉強会  に参加したり、絶対服従の先輩たちの指示でほぼ半強制的に一連の学生運動に参加した。



愛媛県にゆかりのある経営者・高畑誠一

（出典：「鈴木商店記念館」）



国の登録有形文化財になっている神戸大学

（出典：神戸大学広報課「Kobe University Photos」）

先輩の命令で学生運動に動員されたものの、白石氏本人は、マルクス主義的な思想にそぐわず中立的な考えを持っていた。そのため、首を傾げながらの活動であったが、寮の仲間や先輩のほとんどが反体制派であり、「大学なんかに行くな！」、「先生なんか信用するな！」と毎日洗脳されるうちにだんだんと大学に行かなくなった。気が付けば、進級も卒業も厳しい状況になっていた。そして、大学生活5年目に突入したある日、父親が白石氏の行く末を心配し、「今治に戻ってきてタオル屋を手伝え」と言ってきた。将来何をしたいかわからず不安でいっぱいだった白石氏は、「父親の意見に従ってみよう」

と帰今することにした。

大学時代は学生運動一色だったが、それでも学生時代にしかできないさまざまなアルバイトを経験した。たとえば、日給で稼げるガードマンの仕事や麻雀店で牌を磨く仕事、家庭教師などである。概して、時代の波に翻弄された大学生活だったが、白石氏にとっては貴重な青春時代であった。（次号につづく）

